



解説

昭和七年七月、新作童謡の普及活動のため全国行脚していた野口雨情氏が新津に来られた折、当時の料理業組合などの主催で雨情氏の歓迎の宴席で町長の鈴木寅五郎氏が町の活性化と振興を図る目的で雨情氏に作歌を依頼しました。

雨情氏は、早速作歌のための材料収集に取り組み、市内の名所、旧跡を訪ね歩き、イメージを膨らませたのです。

翌八月十四日に、新津の風情を诗情豊かに詠み込んだ十一節の歌詞が完成したのです。作曲は早稲田校時代の親友である「藤井清水氏」に依頼し、同時に振り付けを藤陰静枝氏に依頼し、九月には盛大な踊りと唄の完成披露会が催されたのです。

歌と踊りは、花柳界を中心に広がり、鉄道の分岐点でもあった新津は全国から集まってきた工員や石油業者によって唄いもてはやされました。

現在は、この唄の保存・普及に取り組み、各種イベントなどで市民に親しまれています。

四季の新津

作詞・作曲 箱岩周平

- (四) 新津貯水池 ハ、ズイトセ
茶山の上で(トコサイノ) ハラリコシヨ
小手をサカさせば 茶の陰に
ハア 遠く見えます エイコノ 佐渡が島
- (五) 見せてやりたや ハ、ズイトセ
見渡す限り(トコサイノ) ハラリコシヨ
花はサ 五色に さまざまに
ハア 咲くは小合のエイコノ チューリップ
- (六) 今日も油田の ハ、ズイトセ
櫓の風は(トコサイノ) ハラリコシヨ
いとシサ 小声で なつかしく
ハア 新津繁昌と エイコノ 呼びかける
- (七) 波が打ちます ハ、ズイトセ
蒲原平野(トコサイノ) ハラリコシヨ
青田サ 稲田に 立つ波は
ハア 恋し新津のエイコノ 町までも

(春) 花の秋葉の ほんぼりに

ソツト抱いた 恋ごころ

乙女心よ 想い出よ

なつかしい街 私の新津

(秋) 雨に煙った 並木路

駅の時計も 泣きぬれて

誰を待つやら 蛇の目傘

なつかしい街 私の新津

(夏) 月の光に ぬれながら

君と踊った 松坂は

若い一夜の 想い出よ

なつかしい街 私の新津

(冬) 肌もつづらな 処女雪を

スキーで 行きましよう山越えて

灯が招くよ チラチラと

なつかしい街 私の新津

解説

この唄を作ったのは昭和14年のこと、中国出征当時に湖北省を転戦中、歩哨に立って望郷の念にかられ作詞・作曲したもので、故郷の新津に思いを馳せる情緒がたつぷりで、人の心をとらえました。

昭和30年にテイチクの歌手、鈴木三重子さんと呼んでレコードを作り、歌舞伎座で発表会を開きました。また、昭和38年に島倉千代子さんのレコードも全国発売されました。



新津の民謡

新津松坂 新津小唄 四季の新津

新潟市・新津観光協会

新津小唄

作詞：野口雨情
作曲：藤井清水
振付：藤陰静枝

- (一) 迷ふちやいやです ハ、ズイトセ
新津の駅は(トコサイノ) ハラリコシヨ
西にサ 東に 北南
ハア 心こまかに エイコノ 汽車が出る
- (二) 花になれなれ ハ、ズイトセ
新津の花に(トコサイノ) ハラリコシヨ
春はサのどかに はればれと
ハア 桜林で エイコノ 咲く花に
- (三) 阿賀の川でも ハ、ズイトセ
越す気があれば(トコサイノ) ハラリコシヨ
淵がサ あろうと 瀬があるよ
ハア 越して越されぬ エイコノ ことはない
- (四) よそじゃ見られぬ ハ、ズイトセ
小合の牡丹(トコサイノ) ハラリコシヨ
乱れサ 咲いても 色のよき
ハア おいで 眺めに エイコノ 見物に
- (五) わたしや思いを ハ、ズイトセ
たどて見れば(トコサイノ) ハラリコシヨ
丁度サ 秋葉の 幸清水
ハア 誰に汲ませる エイコノ あてもない
- (六) 秋葉山見りや ハ、ズイトセ
松の木ばかり(トコサイノ) ハラリコシヨ
待つはサ つらいと 知りながら
ハア というて待たずに エイコノ おられよか
- (七) 新津見返り ハ、ズイトセ
また振り返り(トコサイノ) ハラリコシヨ
永いサ 別れにや しちやおかぬ
ハア 思い出すたび エイコノ 逢いに来る



新津松坂

作詞・作曲 不明

イヤーハー

秋葉山から吹き風す風は

新津繁昌とサー

吹き風す

吹き風す

新津繁昌とサー

吹き風す

新町から一ノ丁かけて

おまさがすに 夜が明けた

主は三夜の三か月さまよ

宵にちらりと 出たばかり

盆だか盆でねか月みてさどれ

月は早出て 森の影

北上の山王堂の祭

行けば帰りに あめになる

今宵もまた 騙された

桜林に わし一人

踊りおどらば 姿体よく踊れ

しながよければ 嫁に貰う

揃うたてば ゾックラヤト揃うた

オヤマー 人形さまが 揃うたようだ



新津松坂市内流しは、日本三大流しといわれ、流れるような優雅さは他に見ることが出来ない。この民踊は毎年8月中旬に中心商店街で約1,500人の踊り子が出て県内外の観光客が見守る中で行われる。

解説

新津松坂の由来については種々の説がありますが、その中で最も伝えられているのは、今から四百三十年前の天正年間に新津丹波守（たんばのかみ）勝資（かつすけ）という武将がおり、とても武功の誉高く又風流の道を理解した人物でありました。上杉氏の武将として戦陣の間に歌舞音曲をすすめ、士気を奮いたたせることに努めました。たまたま伊勢松坂に優雅な踊りのあることを聞き、数名の男女に修得させ帰国後に手を加え、領民の間に広くひろめ永く後世に伝えようと新津松坂と名づけたものが今に及んでいるという説であります。また、また一説には蒲生氏郷（がもうじょう）が伊勢松坂から会津に移封された時、随従して来た町民達によって松坂の踊りが伝えられ会津松坂となり、阿賀野川に沿って次第に越後平野各地に広まりましたが、時が経つにつれ新津に育成された新津松坂のみが現在まで伝えられ、他はすたれてしまったという説であります。いずれにせよ、他の民謡に見られぬ特色があり、足の運びには多分に舞楽能の要素が採り入れられているとして民謡研究家の注目する所となっています。



新津松坂

隊形 輪踊り
進行方向 反時計方向に進む
踊り始め 進行方向むきで、笛と樽のビートンで、拍手をすると踊りやすい。

左足を一步前に出すと同時に拍手（ビートン）

(一)節 イヤーハー

一つ 右足を一步前に出し右手斜め前に伏せ伸ばし、左手伏せて胸前におく

二つ

左足つま先を右足にひきそろえ、胸前に伏せ伸ばす。左手は、右手は顔の高さに伸ばす。

三つ

左足を左斜め円心に出し、右手かざし、左手左横に伏せ伸ばす。

四つ

右足を左足にそえながら左斜め前に出し、方向線と円心の間をすべらせながら左足先で地面をすべらせながら左足をかえる。

五つ

左足つま先を右足にそえ、両手前に伏せ伸ばす。

(二)節 秋葉山から

六つ 左足を左横に踏み、右手かざし、左手左横に伏せ伸ばす。

七つ

右足つま先を左足にそえ、両手前に伏せ伸ばす。

八つ

右足を右横に踏み、左手かざし右手右横に伏せ伸ばす。

(三)節 吹き風す風は

九つ 左足つま先を右足にそえ、両手頭上にかざす（笠の横にそえる）

十

左足を斜め円外に出し、両手水平に開く。

十一

右足を左足前に出し（半回転の用意）開いた両手をもどしつつ、左足先を右足に引きつけるながら、進行方向むきとなる。

十二

左足一步前進、チョンと拍手をし、最初の一つにもどる。

